校長室だより～燦燦～ №７６０

対面

2023.5.30

私は、令和３年４月に野田中学校に赴任した。それ以来、令和５年２月までの長期にわたり、全校生が体育館に一堂に会することは、ほぼなかった。話すときは、放送かオンラインだった。それにも、だんだんと慣れてきていた自分がいた。

令和５年２月だった。卒業式に１・２年生も参加させることになり、体育館で全校生による卒業式の練習が始まった。ようやく対面で、全校生に話すことができた。気づいたことがある。やっぱり対面の方がよい。マスクをしていたとしても、生徒の表情、特に目がわかる。生徒の様子に合わせて話すこともできる。自ずと、放送やオンラインとは、話し方が変わる。内容も違ってくる。

調子に乗ったわけではないのだが、３月２３日の修了式では、校長式辞など行わずに、全校群読にチャレンジした。令和５年度のスローガンを「声を届けよう」としたためである。マスクをしたままだった。イメージ通りにはいかなかったが、声を出すということの意識付けにはなったかもしれない。

予定では、４月になってからも、校長のコーナーがあれば、群読を続けるはずだった。ところが、思いの外、生徒も先生方もマスクをはずさなかった。はずしているのは、校長ぐらいだった。私は「マスクをはずしてもかまいませんよ」というメッセージのためにはずしている。とはいっても、先生方と話すときには着けている。

体育館で、大きな声を出して群読をするのは、どうもはばかられる。仕方なく、予定を変更した。群読をやらずに、対面で話すことができるメリットを最大限に生かして、語りかけることにした。そうなると、言葉が重要である。生徒の心に響くような言葉を選び、いかにそれを届けるか。吟味に吟味を重ねる。

いつものことだが、なかなかうまくいかない。むずかしい。年間で校長が生徒の前で話す機会はというと、けっこう多い。それも対面である。これは、絶好の教育の機会なのではないかと考えるようになった。毎週、金曜日に出している「校長通信～夢拓く～」との相乗効果も考えながら、話す内容を考えることがある。

コロナ前は、対面が当たり前だった。そのため、そのよさには目がいかず、気づかなかった。それが、３年の歳月のおかげで、対面のよさが身に染みてきた。顔と顔を合わせての双方向のコミュニケーションは重要だということを再認識することができた。

対面だからといって、話が伝わるわけではない。あくまでも、その内容が大切である。話すスピード、話し方、声のボリュームなど、あらゆることに気を配っていかなければならない。対面によって、心と心が通うような、その場の空気感を重要視したい。対面のありがたみに感謝しながら、これからも生徒に語りかけたい。